白ずきん

柊 サラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
白ずきん

【Ｎコード】
Ｎ９９８３Ｆ

【作者名】
柊　サラ

【あらすじ】
二重人格の（見た目はかわいい）腹黒白ずきんちゃんのどたばた劇。グリム童話「赤ずきん」のパロディです。

（前書き）

テンションについていけない方や、途中で合わないと感じた方は、それ以上読まないことをおすすめします。

あるところに、とても可愛らしい女の子がいました。女の子は、いつもおばあさんがくれた白いずきんをかぶっていたので、「白ずきん」と呼ばれていました。

ある日、お母さんは、白ずきんに言いました。

「森に住んでいるおばあさんが、風邪をひいて寝込んでいるの。お見舞いに、このパンとワイン（ぶどう酒）を届けてちょうだい。危ないから、絶対に寄り道してはだめよ。それから、おばあさんにずきんのお礼も言いなさいね」

お母さんは、そう言って白ずきんにバスケットを渡しました。

「はーい、いってきまーす！」

白ずきんは元気に返事をすると、出かけていきました。

◇　◇　◇

「全く、人使いが荒いわ、母親（あの若作り）。それに、好きでずきん（こんな物）かぶってるんじゃないわよ」

森の中に入って、人気（ひとけ）がなくなったことを十分に確認すると、白ずきんは本音（愚痴）を漏らし始めました。普段（人前で）は取り繕っていますが、素はこうなのです。

「――耳障りよっ！！」

今日は一段と不機嫌だったのか、白ずきんは、道に転がっていた小石を拾うと、少女らしからぬ勢いで、木にとまっていた青い鳥目がけて投げ付けました。

間一髪でそれを避けた青い鳥は、空へと飛び立ち、見えなくなりました。

白ずきんは、道端の花を一瞥して言いました。

「花（ああいう物）でも摘んでいくのが普通なんでしょうけど、あ

の人ウザ(おばあさん)くて嫌いだし、時間の無駄以外の何物でもないから止めましょう」
何であんなヤツに、とかぶつぶつ言いながら、白ずきんは森の奥へと歩いて行きました。

しばらくして、白ずきんは、前方の木の陰に隠れてこちらをうかがっている、あからさまに怪しいオオカミを見付けました。
――何アレ（あのオオカミ）、あれで隠れてるつもりなの？　アホと言うか、大バカね。無視するに限るわ。
シカトを決め込んだ白ずきんが木の前を通り過ぎると、後ろでオオカミが動く気配がしました。
――背後から襲おうって言うのね。……いいわ。
白ずきんは、さっと振り向きました。そして、きょとん、とオオカミを見上げます。
「へっ！？　あ……いやぁ……そのぅ……」
オオカミは、両手を挙げた格好のまま、言い訳に困っていました。
そして、
「え……っと、……い、いいお天気だなぁ、ところで、お嬢ちゃんはこんな森の中に何をしに来たんだい？」
と、相当無理のある話題転換をしました。
――うわっ、何コイツ（このオオカミ）。もっとましな事言えないの？
そんな中身（本音）は全く感じさせず、白ずきんは言いました。
「『お嬢ちゃん』じゃなくて、白ずきんよ。風邪をひいちゃったおばあさんの家に、パンとワイン（ぶどう酒）を届けに行くの。オオカミさんは、何でそんな格好してるの？」
オオカミは、気まずそうな顔をして数秒考えた後に、急にラジオ体操を始めました。
「た、体操をしてたんだよ。か、体が……な、鈍っちゃうからね」
――引くわ……さっさとどっかに行かないかしら。

「ふーん？」
白ずきんが納得したと思ったオオカミは、ほっとした様子を全て顔に出しながら、白ずきんに言いました。
「そう言えばさっき、おばあさんが風邪をひいたと言ってたよね？
それなら、そこに生えている花を摘んでいってあげたらどうだい？　きっとすぐに風邪も治っちゃうよ」
――面倒なこと提案して……私を待ち伏せして食べようってのね。……見てなさい。
「そうね、きっと喜ぶわ！　ありがとう、オオカミさん！　頭いいのね」
――どこがよ！　バカ以外の何者でもないでしょう！？バカ（コイツ）にだけは「ありがとう」なんて言いたくなかったわ……殺ってやる
にっこりと笑い、花を摘み始めた白ずきんを確かめると、オオカミは、森の奥に足早で駆けて行きました。
――――ひゅんっ
その横を、何かが物凄い勢いで通過しました。
「……ん？」
オオカミは振り向きましたが、白ずきんがせっせと花を摘んでいるだけでした。
「……気のせいか」
そう言って再び走り出したオオカミが、白ずきんの持っている銃に気付くことはありませんでした。

◇　◇　◇

森の奥の小さな家を見つけたオオカミは、窓から、中で寝ているのがおばあさんであることを確かめました。そして、ドアの前に立つと、ノックをして、白ずきんとは似ても似つかない裏声で言いました。

「おばあさん、こんにちは。白ずきんよ。パンとワインを持ってきたの」
しかし、耳の遠いおばあさんは、その声を白ずきんだと思いました。そして、
「ありがとう、白ずきん。よく来たねぇ。開いているから入っておいで」
と言いました。
オオカミは、すごい勢いでドアを開けると、寝込んでいたおばあさんをペロリと食べてしまいました。
そして、おばあさんの服を着ると、ベッドに潜り込みました。

◇　◇　◇

少しして、白ずきんがおばあさんの家に着きました。
白ずきんは、窓の一つが鼻の形に湿り、ドアの蝶番が壊れているのを見付けました。
――窓(あそこ)であの人(おばあさん)がいるのを確かめて、入る時に勢い余ってドアを壊した……ってところかしら。
「……どこまで面倒に巻き込んでくれたら気が済むのよ」
不機嫌極まりない顔で、中に居るのがオオカミなのを確かめ、白ずきんは外れかかったドアをノックしました。
「おばあさん、こんにちは。白ずきんよ。パンとワイン（ぶどう酒）を持ってきたの」
オオカミは、小さくガッツポーズをして、おばあさんが言ったようにいいました。
「ありがとう、白ずきん。よく来たねぇ。開いているから入っておいで」
中に入った白ずきんは、オオカミ（おばあさん）を見ました。
――気色悪っ！　似合わないったらないわ。
そして、笑顔（営業スマイル）で言いました。

「おばあさん、大丈夫？　熱はある？　痛くない？」
オオカミ（おばあさん）は答えました。
「ええ、大丈夫だよ。それより、もっとよく顔を見せておくれ」
――近寄れって言うの！？　冗談じゃない！　こっちはそのキモさに吐き気がしてるって言うのに！
近付いた白ずきんは、オオカミ（おばあさん）に言いました。
「おばあさんのお耳は、何でそんなに長いの？」
オオカミ（おばあさん）は答えます。
「それは、白ずきんの声がよく聞こえるように、通販で、二十三万八千円の長耳型補聴器を買ったからだよ」
――何よ、その言い訳。宴会芸にでも使う道具みたいじゃない。と言うか、それ（法外な値段）は絶対詐欺だわ。
白ずきんは、また言いました。
「ねぇ、おばあさん。おばあさんのお鼻は、何でそんなに大きいの？」
オオカミ（おばあさん）は答えます。
「これはね、白ずきんに風邪をうつさないための、特別仕様のマスクなんだよ」
――漫才やってるような気になるのは、私の思い違いかしら……？
また、白ずきんは言いました。
「おばあさんのおく――」
オオカミは、身構えました。「それはね……お前を食べるためさっ！」と言い、飛びかかろうと思ったのです。
――そうはさせないわ。
「――お薬は、どこのお医者さんにもらったの？　ヤブ医者じゃなかったの？　ジェ〇リックなの！？」
「それはお前を食――へ？」
勢いよく飛びかかろうとしたオオカミは、何とも間の抜けた声を出しました。
――ざまぁみろだわ。

「……？　どうしたの、おばあさん」
内心勝ち誇り、白ずきんは言いました。
「え、……あ、ええ、何でもないのよ」
と、オオカミ（おばあさん）は言いました。
「そう？　きっとまだ風邪がよくなっていないのね。もう帰ります。早くよくなってね、おばあさん」
そう捲くし立てると、白ずきんは帰ろうとしました。
――ザマないわ、一生そこで寝てればいいのよ。
それを見たオオカミは、急に腹が立ってきました。白ずきんにやり込められたことには気付いていないものの、自分の考えていた通りにいかず、気に入らなかったのです。
「――ガウッ！！」
オオカミは勢いよく跳ね上がり、白ずきんに飛びかかりました。
「えっ、何――」
少し油断していた白ずきんは、オオカミに一口で食べられてしまいました。それに満足したオオカミは、ベッドに横になり、すぐにいびきをかき始めました。
しばらくして、オオカミのお腹の中から、カチリ、という音がしました。
――パンッ！！

◇　◇　◇

――パァンッ！
狩人は、獲物の青い鳥が逃げていった方へと、ライフルを撃ちました。
「……逃がしたか」
確認に行きましたが、残念ながら、仕留めることは出来ませんでした。
青い鳥を追って、その方向に進んで行くと、小さな家がありまし

た。そこは、狩人の知り合いであるおばあさんの家でした。
「ぐがぁ～、ぐうぉ～」
「――何だ？」
その家から大きないびきが聞こえてきて、狩人は首を捻りました。おばあさんが、間違ってもそんないびきをかくはずがありません。
狩人は、おばあさんの家のドアを静かに開けました。
「こ、こいつは！」
そこで寝ていたのは、おばあさんではなくて、オオカミでした。この辺りでは有名な人食いオオカミです。
撃ち殺そうとライフルを構えた狩人は、既にオオカミのお腹に、撃たれた痕があることに気が付きました。
――ま、まさか、俺の撃った弾が……
辺りを見回した狩人の目に、割れた窓ガラスが見えました。寝相の悪いオオカミが、つい先程壊したものです。
そして狩人は、中に誰かが入っているのではと、オオカミのお腹を鋏で切り開きました。すると、どうでしょう。中から白ずきんと、おばあさんが出てきたのです。
三人は相談して、オオカミのお腹に石を詰めて縫い合わせよう、と言う狩人の案を実行することにしました。
さっそく、石集めです。
――オオカミ……見てなさい！
白ずきんは、大急ぎで出て行くと、生石灰（白い粉）を大量に運んで来ました。
「狩人さん、砂も入れていい？　石は重くて持ってこられなかったの」
狩人にはそう言い訳をしておきました。
オオカミのお腹に、石と生石灰（白い粉）を詰めて縫い合わせると、三人は外に出て様子を伺いました。
◇　◇　◇

「ふわぁぁ～」
しばらくして、オオカミは目を覚ましました。何だかとても喉が渇いていて、オオカミは川で水を飲もうと、半分寝ぼけながら外に出ました。
川に落ちることなく水を飲んだオオカミは、もうひと寝入りしようと、川に背を向けて、帰ろうとしました。
……と。
「熱っ！」
オオカミは、自分のお腹が熱くなっていることに気が付きました。お腹の熱は、次第に上がっていきます。
「熱っ！　な、何だこの熱さはっ！　あ、熱い！　うわぁー……」
遠くから見ていた三人の前で、オオカミは川に飛び込んで、見えなくなりました。
「……失敗したかと思ったが、どうにか成功したみたいだな」
――いい気味よ。
そう言って安堵する狩人の横で、白ずきんは、気づかれないように、にやりと笑っていました。

◇　◇　◇

「あーあ、帰ったらシャワー浴びなきゃ。全く、汚いったらありゃしない」
狩人とおばあさんと別れた帰り道。森の入り口辺りで、白ずきんはそう呟きながら帰っていきました。

―めでたし、めでたし（？）―

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9983f/

白ずきん

2010年10月10日07時57分発行